

第 13 回 「教養人と知識人と（一）」

君子と小人と。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 13 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「教養人と知識人と」という題の第一回です。

『論語』には、「君子」「小人」ということばが出てくることをご存知と思います。

私は『論語』について、すべての訳をするという訳注の仕事をしていました。大体原稿はできましたが、どうしても納得できないことばがありました。それが、「君子」「小人」でした。

「君子」「小人」というのは、『論語』の中で、何度も出てきます。そこで、いろいろな訳を見ってみました。どの本も、「君子」というのは、りっぱな人、「小人」というのは、つまらない人といった訳でした。なるほど、それで一応の意味は通じます。

しかし、私はしっくりこなかったのです。

なぜかと言うと、孔子の日頃の仕事は、自分の弟子達との議論であったり、自分が推薦する国の様子を見たり、考えたりすることでした。

そんな仕事をしている人がりっぱな人、つまらない人という区別をしていたのでしょうか。

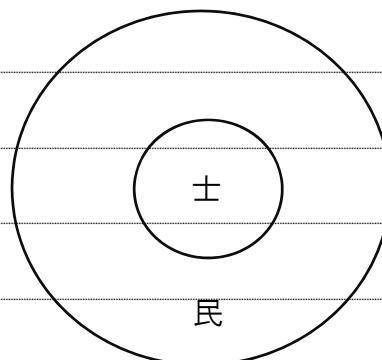
そこで、私はしばらく『論語』を離れまして、当時の社会という広い見方で、「君子」「小人」が何であるかを考えようと思いました。私なりの発見がありました。

「士・農・工・商」という分け方に秘密がありました。

【士・農・工・商の中心である士】

全体を捉えてる図を大きな円とします。農業、工業、商業に従事する人たちを「民」。

真ん中、中心に「士」というグループがいると考えてください。そして政事を行っている。



孔子自身は、もちろん「民」の生き方について、大きな関心はあったのですが、孔子の学校ということから考えますと、「民」には直接教えることはない。あくまで、自分の学校に来た学生諸君を教えます。ですから、そのテーマの中心はここ「士」にあります。

この「士」の在り方が大事になってきます。「民」に関しても言っていますが、それは漠然としたものです。「士」のグループに対しては具体的に教える必要があった。

そこで私はわかりました。

「君子」「小人」、これは確かにランク付けをしているのですが、「君子」と「小人」というのは、あくまでも、この「士」について言っていることばと思ったのです。

「民」について、「君子」「小人」と言っているわけではないのです。

「士」になろうとしている、「士」そのものでもいいのですが、その人たちへの評価として、「君子」「小人」があるのではないか、こう気が付いたのです。

このように見てみると、中身を理解することができました。

それが今回のテーマです。

すなわち、「教養人と知識人と」、それが「君子」「小人」に当てはまります。

私は思い切って次のようにしました。

「士」たる者、民の指導者たる者、まず必要なのは「知識」です。

これは否定することはできません。そして「知識」を得た後、どうなのか。

【知識と徳性】

「知識」だけに終わる人も多かったようです。

前回申しましたように、先生、早く就職先を世話してください、といった弟子がいました。

こういう人は「知識」を得ただけで、もう一刻も早く就職したいと思っていたのですね。

ところが孔子は、それはだめだと言う。「知識」プラス「徳性」を高めていかねばならないんだ、
そういうことを言いました。私はわかりました。

孔子は、自分の学校に来ている学生達、あるいは世の為政者を見ていて、そこには二種類ある、
としたのではないか。

一つは、知識を持っているのですから、「知識人」である、と。

そして「知識人」であり、さらに「道徳的徳性」を高めていった人、これは「教養人」だ、と。

「教養人」は「知識」プラス「徳性」を持った人達を指します。

すると、「君子」は「教養人」ということがいいのではないかと思いました。

そして「小人」は「知識人」。そう思いました。

「君子」「小人」というのは、孔子が使ったことばですが、それを現代のことばに当てはめる
なら、「君子」は「教養人」、「小人」は「知識人」に相当すると、私はそう思いました。

そう決めたあと、私は『論語 全訳注』を一気に書き上げました。

私の訳注では、「君子」は「教養人」と訳しております。「小人」は「知識人」と訳しております。

「小人」をつまらない人とは訳しませんでした。これが私の『論語』に対する態度と言ってい
いかと思います。

さて、日本では高学歴の人は多い。同じ学歴を有していても、「知識人」もいれば、「道徳的徳性」
を具えた「教養人」も、中にはいるでしょう。これは今日も変わらない。私はそう思っています。

そこで、孔子は有名なことばを残しているので、読みましょう。

ししかい いわ なんじくんしじゆ な しょうじんじゆ な
「子 子夏に謂いて曰く、女 君子儒と為れ、小人 儒と為る無かれ、と」(雍也第六)

「子」これは孔子です。孔子が「子夏」という弟子に、次のようにおっしゃった。

「謂いて曰く」は強めていることばです。しかと伝えましたよ、ということです。はっきりと伝えましたよ、と。

子夏は秀才です。この人は孔子の学問を受け継いだ中心人物です。その人にはっきり言った。

「女」これはサンズイを付けた「汝」と同じです。おまえは「君子儒と為れ、小人儒と為る無かれ」、はっきり言えば「君子となれ、小人となるな」と、こう言っています。

「知識人」に終わらずに、「徳性」のある「教養人」となりなさい、ということ。

ここに、面白いことばがついています。「君子儒」「小人儒」、それらの「儒」ということばです。

一般的には「君子」「小人」でいいわけですが、なぜ、わざわざ、「儒」を付けているのか。これがこの文の、大きな意味を表しています。

孔子は「儒教」を基礎付けた人です。この人の考え方を「儒教」と言います。つまり「儒」というグループが存在していたのですね。孔子は「儒」という集団と深い関係があるのです。

孔子のおとうさんは農民です。後に再婚した相手が「儒」と言われる集団の女性だったのです。おそらく同居できなかったと思うのです。たぶん通い婚という形であったのではないかと推測されております。

ですから孔子は生まれてからしばらくの間は「儒」という集団の中で成長したらしいのです。後に、10歳前後か、そのぐらいに、おとうさんの家に引き取られたのではないかと考えられます。

【儒とは何か】

それでは「儒」とは何か。

今日の研究でずいぶん明らかになりました。「儒」という職業は、簡単に言えば、祈禱師です。雨乞いをしたり、お葬式の仕事をしたりする宗教者の集団でした。

この「儒」という問題が、孔子の思想の中に纏い付いてきます。

宗教学的に言いますと、この「儒」というのは、シャーマンです。シャーマンというのは、靈魂を降ろす仕事をする人です。靈魂を降ろすことをシャーマニズムと言います。シャーマニズムの中心がシャーマンという、そういう祈禱師グループです。

儒教の中に、この儒集団の宗教者の、靈を降ろすという能力、働き、考えが育っていきます。それはまた改めてお話ししましょう。

今回は「教養人と知識人と」の第一回のお話でありました。